熊本大学教育学部紀要，人文科学
第56号，219－228，2007

多義性と意味変化における構文の役割について

登　田　龍　彦

On the Role of Constructions in Polysemy and Semantic Change

Tatsuhiko Toda

(Received October 1, 2007)

The aim of this paper is to discuss the role of constructions in polysemy and semantic change, focusing on the verb *write* in the double object construction and the verb *put* in the caused-motion construction. I argue that *write* has not yet acquired the lexical meaning 'write and send' except when accompanied by clauses introduced by *that, how* and the like. I also claim that the role of constructions is important in causing polysemy and semantic change.

Key words : construction, polysemy, semantic change

1. はじめに

本稿の目的は，動詞の多義と意味変化を生み出すプロセスにおいて構文あるいは構文的意味が果たす役割があるのかどうか，もしあるとすればどのような役割かを議論することである．特に，二重目的語構文（the double object construction）に生起する動詞 write と使役移動構文（the caused-motion construction）に生起する動詞 put を取り上げ，多義性と意味変化について考察する．議論の構成は次の通りである．先ず第2節で，動詞の意味と構文の関係を概観した後，第3節で，動詞 write の多義性について考察する．第4節では，動詞 put の意味変化について考察する．そして第5節で，議論をまとめる．

本稿は，動詞の意味変化とその前段階である多義性の生起における構文の果たす役割に関する試論というべきものであり．Goldberg（1995, 2006）の提唱する構文文法（construction grammar）寄りの視点で議論を進めるが，構文文法の主張に完全に賛成を唱えている訳ではない．また，本稿は，意味変化の要因として言語使用という言語構造外的要因を提唱する Traugott and Dasher（2002）の主張とは異なり，言語構造内的要因の重要性をも指摘するものである．

2. 動詞の意味と構文

Levin and Rappaport Hovav（1995: 152）に依れば，Kirsner（1973: 110）は，（1a）の remain には「三人の男たちが部屋に故意に留まることを選んだ」という動作主的（すなわち意図的）な読みがあるが，There 構文の（1b）の remain には動作主的な読みはないと述べている．従って，（1b）は「三人の男たちが部屋に残っていた」という意味しかない．ただし，（1a）にも（1b）に見られる非意図的な読みはある．

(1)　a.　Three men remained in the room.
　　b.　There remained three men in the room.

また，影山（1996: 39）も，（2）を挙げて副詞 reluctantly との共起可能性の視点から，同様の主張をしている．

(2)　a.　The Queen stood in front of them reluctantly,

b. *There stood the Queen in front of them reluctantly.

嫌々人前に立つという行為は意図的行為であるが，この読みは（2b）の There 構文には認められない．

There 構文が成立するのは，動詞が共起する前置詞句などの意味と相俟って，主語の動作主性を打ち消すような存在や自然発生的な意味を持つ場合に限定されると言っても良いであろう（久野・高見 2002: 35-79）．

以上の例では，動詞 remain と stand に見られる（多義的）意味の中で There 構文が要求する意味が採択され，不相応な意味は押さえられるというものであった．

次に，二重目的語構文に生起する動詞 teach を取り上げ，動詞の意味と構文の関係について議論しておきたい．先ず，二重目的語構文について Pinker（1989: 210ff.）の主張に触れておきたい．Pinker は，to 与格構文と二重目的語構文における決定的な相違として，前者が直接目的語指示物の間接目的語指示物への移動（GO）の出来事概念を表すのに対して，後者は間接目的語指示物による直接目的語指示物の所有（HAVE）の状態概念を表すと主張している．このように仮定にすれば，(3) のような give のイディオム表現の分布は容易に説明できると指摘している．

(3) a. Janice's behavior gave John an idea.
b. *Janice's behavior gave an idea to John.

(3a) では，ジャニスの振る舞いによってジョンにある考えが浮かんだことを表している．これに対して，与格構文（3b）は，コミュニケーショによってある考えが移動することを表すが，ジャニスの振る舞いは考えの起点（すなわち考えの最初の所有者）にはならないので非文となる．本稿は，この主張を基本的に採用している．

安井（1988: 213-4）は，(4c) の日本語では表せない（4a）と（4b）に見られるニュアンスの違いを表すために，(4a) の訳として（5）を挙げている．

(4) a. He taught the boy English.
b. He taught English to the boy.
c. 彼はその少年に英語を教えた．
(5) a. 彼はその少年に英語を教え込んだ．
b. 彼はその少年に英語を仕込んだ．
c. 彼はその少年に英語を覚えさせた．

安井（1988）の言うように，(4a) のような二重目的語構文における teach の訳語として，「教え込む」「仕込む」「覚えさせる」などが穏当であるかもしれないが，teach の語彙的意味としてそれらを辞書に記載できるかどうかはまた別の話である．例えば，国内外の英英辞典や『ジーニアス英和辞典（第四版）』（以下，『ジーニアス[4]』）にもそのような意味記述はないようである．

構文が動詞の多義や意味変化に与える影響について考察する際に留意すべきことは，動詞それ自体の意味と構文によって与えられる意味の区別である．構文によって与えられる意味的要素（いわゆる「構文の項」）の例として，Goldberg（2006: 42）が挙げている例（6）について考えてみよう（下線筆者）．

(6) a. He baked <u>her</u> a cake.
b. He kicked <u>him</u> a ball.

(6a) における創造動詞（verbs of creation）の bake の受け手 her と（6b）における移動動詞（verbs of motion）の一種である kick の受け手 him の下線部要素は，すべて省略可能で動詞の不可欠要素ではない（cf. (7)）．

(7) a. He baked a cake.
b. He kicked a ball.

さらに，使役移動構文に生起する動詞 sneeze について考えてみよう．sneeze は，本来自動詞用法しか持たない

が，使役移動構文に生起する．

(8) Frank sneezed the tissue off the table. (Goldberg 1995:152)

(8) の意味は，「フランクは，くしゃみをしてティッシュをテーブルから飛ばしてしまった.」である．しかし，動詞 sneeze の語彙的意味には，「くしゃみをして何か（体外物）を飛ばす」という意味は，（まだ）ない．ただし，急いで付言しなければならないことに，The Oxford English Dictionary（OED[2]）は，(9) に示すように 1677 年の例を初例とする動詞 sneeze の他動詞用法を挙げている．

(9) 3. *trans.* To eject or cast by sneezing.
  a. 1677. JOHNSON in *Ray's Corr.* (1848) 128 Horsemen are not agreed what that is the foal is said to sneeze, which they call a milt.
  b. 1930. CAMPBELL *Adamastor* 76 Their horses..Vast phantom shapes with eyeballs rolling white That sneeze a fiery steam about their knees.
  c. 1961. G. DURREL *Whispering Land* viii 194 Anyway, when I had sneezed some of the dust out of my nose, I clapped dutifully outside the gate.

(9) の定義と用例から分かるように，放出動詞（verbs of emitting）の一種とも言える sneeze の他動詞用法での目的語は，口や鼻の中にある体内のものを指すのであって，(8) におけるティッシュのような体外のものではない．問題の目的語は，馬が出す激しい蒸気や人の鼻の中のほこりである．(8) における用法の sneeze の意味「(体外物を）吹き飛ばす」は，『ジーニアス[4]』にはまだ記載されていない．

以上，動詞の意味が構文の意味（あるいは項配列型）に影響を受けることを見た．次節では，本稿の主題である動詞 write の意味について考察する．

3. Write

動詞 write は，以下のような項の分布を示す．

(10) a. John wrote a letter to Mary.
  b. John wrote Mary a letter.
  c. John wrote a letter.
  d. John wrote (to) Mary.
  e. John wrote. (以上 岸本 2001: 131)

(10) からも窺えるように，動詞 write は，直接目的語（a letter），間接目的語（Mary），前置詞付目的語（to Mary）の各々を随意的に取る動詞であり，何項動詞と規定することが難しい．本稿ではこの問題に立ち入ることはしない．ここでは，give や teach で見られたような主題（ここでは手紙）の移動（の含意）の有無と動詞の意味変化の有無について考察する．

次の例文を見てみよう．

(11) a. John wrote a letter to Mary, but she didn't open it.
  b. John wrote Mary a letter, but she didn't open it.

(11) の「ジョンはメアリーに手紙を書い（て送っ）たが，メアリーは封を開けなかった.」という意味から，手紙が一応メアリーのところに届いたということは明らかである．しかし，以下のような例では，手紙の移動の含意は打ち消される．

(12) a. John wrote a letter to Mary, but he didn't mail it.
b. John wrote to Mary, but he didn't mail the letter.
c. John wrote Mary a letter, but he never sent it.

(12a-c) の but 以下で手紙を投函してない意味を表す文を続けても意味の矛盾を引き起こさないことから，write の二重目的語構文および与格交替構文は，手紙の移動を普通含意するといっても，その含意は意味論的含意 (semantic implication) ではなくて語用論的含意 (pragmatic implication) であることが分かる．この事実は，下記の例特に (13b) の例からも明らかである．

(13) a. The letter which I wrote in Paris was never mailed.
b. The letter which I wrote to my brother was never mailed. (Green 1974: 87)

(13b) は「兄に書いた手紙は決して投函されなかった」という意味である．

さらに，Green (1974: 107) は，サンタクロースの存在を信じていない人は，(14a) を言い，(14b) を言うことはないだろうと，指摘している．

(14) a. Did you really write a thank-you note to Santa Claus?
b. Did you really write Santa Claus a thank-you note?

つまり，与格交替構文 (14a) では礼状を書いて郵送することを強調するが受領行為を前提としていないのに対して，二重目的語構文 (14b) ではサンタクロース自身による礼状の受領が前提となっている，と解釈できる．ただし，重要なことに，Wierzbicka (1988: 365) は，(14a,b) のどちらも書き手がサンタクロースが礼状を実際に手にして欲しいと思っていたことを含意はするが，実際に手にしたことを明確に含意しないと述べている．

動詞 write が投函を意味するのかどうかということに関して，小西 (1980: 1777) は，write の概説の中で以下のように述べている．

(15) 「この語の中核的意味は，「鉛筆・ペンなどで文字・記号を記す」ということである．この意味が拡大されて文字を書くことにより伝達をする，つまり「手紙を書く，出す」意でも用いられる．この意では，'write to O'，'write O_1＜人＞ O_2 ＜手紙＞ '，'write O_2 to O_1' などの型を取り，さらには不定詞，that 節を従える型もある．(後略)」(下線筆者)

(15) で注目すべきは，問題にしている二重目的語構文あるいは与格交替構文において，write が「(手紙を) 出す」意で使用されるという指摘である．『ジーニアス[4]』も，問題の構文における write の語彙的意味を「書き送る」と記述し，以下のような例文と訳を挙げている．

(16) a. He wrote his lawyer a note. (彼は弁護士に短い手紙を書いて出した)
b. He wrote a note to his lawyer. (彼は弁護士に短い手紙を書いて出した) (『ジーニアス[4]』)

しかしながら，(12) で見たように，動詞 write に，語用論的意味としてではなく，語彙的意味として「書き送る」と記述するのは妥当とは思えない．直接目的語を省略し，last week というある一定の過去時を明示した場合でも，「投函する」の意を打ち消す後続文を許す (cf. (17)，(18))．さらに，(16) に同様の「投函する」意を打ち消す後続文を付けても矛盾はしない (cf. (19))．従って，write の語彙的意味として無条件に「書き送る」と記載するのは穏当とは思えない．

(17) a. John wrote to Mary, but he didn't mail the letter. (= (12b))
b. John wrote Mary, but he didn't mail the letter.
(18) a. John wrote to Mary last week, but he didn't mail the letter.
b. John wrote Mary last week, but he didn't mail the letter.

(19) a. He wrote his lawyer a note, but he didn't mail it.
b. He wrote a note to his lawyer, but he didn't mail it.

ここで, OED[2]における write の意味記述を吟味し,「手紙を書いて出す」という語彙的意味の有無について確認しておきたい. OED[2] (s.v. *Write*) の (問題となる箇所の) 記述は以下の通りである.

(20) 4a. To state or relate in writing; to draw up or frame a written statement of (circumstances, events, etc.); to chronicle or make a record of. Also with *to, unto* (a person), or indirect personal object.
In very frequent use from c 1300.
c 900 *Bœda's Hist.* Pref. (1890) 4 þæt ic be ðam halgan fæder Cuðbyrhte wrat oððe on þysse bec oððe on oðre.
4b. With clause as object, either introduced by *that,* etc., or directly quoted.
4c. To convey (tidings, information, etc.) by letter; to send (a message) in writing. Freq. with *to* or *unto*, or with dative of person; also with *how, that*, etc., and clause.
?a 1400 *Morte Arth.* 3904 He..waite vn-to Waynor how the werde chaungede.

(20) の記述から窺えるように, 確かに write は「書いて記述する」という意味で古英語から使用されているのに対して (cf. (4a)),「書いてメッセージを送る」という意味では後期中英語から使用されしかも直接目的語に節が来ている場合である (cf. (4c)). この事実の証拠として, (21) に見られる対立を挙げることができる.

(21) a. *John wrote (to) Mary how the world changed, but he didn't mail the letter.
b. John wrote (to) Mary a letter as to how the world changed, but he didn't mail the letter.

「投函する」意を打ち消す後続文の可能性から明らかなように, write の直接目的語として how 節が生起する場合はその内容の手紙等を送ったという意味を示す (cf. (21a)). これに対して, 手紙等物理的な書き物が直接目的語として生起する場合は, 既述したように手紙等を送ったという意味を必ず示すものではない (cf. (21b)).

興味深いことに, The Concise Oxford Dictionary of Current English (COD) の記述に従えば, 少なくとも 30 年前から問題の「手紙を書いて送る」という意味は米語で口語であるようだ (cf. (22)).

(22) Tr. *US* or *colloq.* Write and send a letter to (a person) (wrote him last week) (COD[6], COD[7], COD[8], COD[9])

因みに, (21) のような対立は日本語にも見られる.

(21') a. ??ジョンはメアリーに世の中がどのように変化したかと (手紙に) 書いたが, 投函しなかった.
b. ジョンはメアリーに世の中がどのように変化したかについて手紙を書いたが, 投函しなかった.

(21'a) の「メアリーに。。。と書いた」という場合は, メアリー宛てに書いた手紙等を送って伝えたということを意味するのに対して, (21'b) の「メアリーに。。。について手紙を書いた」という場合はその様な意味はないように思われる.

以上の write の意味分布をまとめると以下のようになる.

(23)

		語彙的意味: 'pen'	'write and send'
a.	write NP_1 to NP_2	OK	*
b.	write NP_2 NP_1	OK	*
c.	write (to) NP_2	OK	*/??OK (*US* or *colloq.*)
d.	write (to) NP_2 Clause	??	OK

動詞 write は, 直接目的語に節を取る場合と米語や口語の場合以外には語彙的意味としての「書いて送る」とい

う意味はまだ確立していない．ただし，(23b) の構文型において write の語彙的意味として「書いて送る」が確立していないからといって，構文的意味が全く動詞の多義とは無関係であると言っているわけではない．「書く」という動詞は直接目的語の創造を目的とする達成動詞（verbs of accomplishment）(cf. Vendler (1967)) の 1 つで，その遂行行為の意味自体からは「送る」という意味は含意されない．目的語さらに目標（goal）が伴った「。。。に手紙を書く」という二重目的語構文の構文的意味から「送る」という意味が含意されることになる．各単語の結合的意味の総和から「送る」という意味にはならない．確かに「手紙を書く」という行為から慣習的に「投函する」行為を容易に連想できるが，「調査結果を書く」という行為から「調査結果を（書いて）送る」という行為は連想し難いし，He wrote me the results of his investigation. は不自然であるようだ．彼が私に調査結果を書いて送ってきたことを示すためには，私のインフォーマントによれば，He wrote me with the results of his investigation. のように with が必要となる．二重目的語構文において write が「書いて送る」意を含意するためには，構文型だけでなく動詞 write と目的語とのコロケーションが関与し，write の語彙的意味としては 'write and send' の意味は（まだ）ないことを示している．

問題は，(23d) の場合である．何故このような構文型の場合には「送る」ことが語彙的意味として内包されるであろうか．現時点で言えることは，この構文型は動詞 tell などを代表とする「伝達動詞（verbs of communication)」に属し (cf. Levin (1993))，書くことは伝達手段に過ぎないということである．つまり，"write someone that…" は "communicate with {by/in} writing" とパラフレーズされ，過去時制であれば当然伝達が行われていることを意味することになる．

以上，動詞 write の多義の生起には構文的意味も深く関わっていることを見た．次節では，動詞が意味変化を起こした例として動詞 put を取り上げて考察する．

4. Put

動詞 put の場所語句は，(24) - (27) の例からも明らかなように，目的語と異なり文脈から復元できる場合には省略できる．

(24) A: Shall I put these books on the shelf?
B: *No, you'd better put on this table.

(25) A: Shall I put those books on the shelf?
B: No, you'd better put these.

(26) Ann: I don't know how to finish this letter.
Sue: Why don't you put 'yours sincerely'? (Groefsema 1995: 142)

(27) John, Bruce and Mary were playing a game which involved putting something on the table. John put his book, Bruce put his pipe, and Mary (put) her glasses. (Groefsema 1995: 143)

(24) において，A の発話で既に問題の本が記述されているので，B の発話で省略できそうであるが，英語では動詞の目的語省略については厳しい制限があり，たとえ前置詞句に対照的な焦点が置かれていても，省略できない．これに対して，(25) では棚の上が A の発話で既に問題になっていて，前置詞句は省略可能である．同様の説明が，(26) と (27) の例における前置詞句省略について当てはまる．

さらに，目的語との結合的意味により言語慣習化して場所語句が省略された表現に (28) と (29) がある．(28) の二番目の文では場所前置詞句全体が省略されているのに対して，(29) では前置詞の目的語が省略されている．

(28) Are you eating up__? Would you like me to put the kettle, mummy? (García Velasco and Portero Muñoz 2002)

(29) a. I put {a frying pan / the kettle} on (the flame).
b. I must put my sunglasses on (my nose).

ここで，文脈や場面に依存して省略される前置詞句の生起について考察しておきたい．OED[2]の記述（30）によると，putの意味は本来‘thrust’や‘push’の意味を表し，主題を示す名詞句が位置を変化させることは随意的であった．この意味でのputは廃用（obsolete）となっている．

（30） I. To thrust, push, and allied senses, in which the application of force is expressed. +1. *trans*. To thrust, push (with or without resulting change of position); to knock. *Obs*. （OED[2]）

例えば，（31）に示している中英語の例から明らかなように，従属節でputとthrustが併記されしかも場所語句だけでなく目的語名詞句までも表れていない．（31）の意味は「何度も押したが小さな石は微動だにしなかった.」である．

（31） a1450(a1338) Mannyng *Chron.Pt.1*（Lamb 131）8889: When þey ofte hadde put & þryst..3it stirede þey nought þe leste ston.
（http://ets.umdl.umich.edu/cgi/m/mec/med-idx?type=byte&byte=152495902&egdisplay=compact&egs=1525035）
‘When they had often put and thrust it, yet they did not stirred the least stone at all.’

さらに興味深いことに，Culicover and Jackendoff（2005: 174-5）は，（32）に示すような動きの経路（path）の義務性テストを行っている．

（32） a. He { kicked / threw }the pumpkin （down the stairs）.
b. He kicked the pumpkin, but it didn’t move at all.
c. *He threw the pumpkin, but it didn’t move at all.

まず，（32）から明らかなように，kickの場合は蹴ったからといって必ずしも動かないことがある（cf.（32b））．これに対して，throwの場合は投げれば投げられた主題は必ず動くため，文の前半部分と後半部分で内容の矛盾が生じて非文となってしまう（cf.（32c））．動詞throwは，kickと異なり，動きの経路（a path of motion）を意味論的項（semantic argument）として義務的に含意する（意味論的項については，Jackendoff 2002参照）．

このテストをpushに適用すると，（33）のような結果になる．（33）が文法的であることから，動詞pushは意味論的項として場所の経路を義務的に含意していないことがわかる．

（33） He pushed the pumpkin, but it didn’t move at all.

本格的な調査を行う必要があるが，‘push’を意味していた動詞putの項構造は，古英語・中英語を経て初期近代英語で二項述語の項構造から三項述語の項構造へと変化したと思える．Goldberg（1995）の構文文法流に換言すれば，構文の項が動詞の項へ変化したことになる（cf.（34）の記述の詳細については，Goldberg 1995参照）．

（34） a. PUT <putter puttee >
b. PUT <putter put.place puttee >
c. PUT <putter put.place puttee >

↓

本稿では，この変化を（35）のような原理として述べておく．

（35） 構文の項から動詞の項へ推移する傾向がある．

つまり，場所語句がputの義務的要素として文法化したというものである．

Jackendoff（1990: 78）は，動詞putの義務的前置詞句には場所（place）あるいは経路を表すものが生起するが（cf.（36）），起点（source），方向（direction），ルート（route）は生起しない（cf.（37）），と述べている．

(36) a. George put the book {at the corner of the bed / with the telephone}.
b. Martha put the book {into the drawer / onto the counter}.
(37) a. *Groucho put the book from the shelf.
b. ?*Harpo put the book toward the bed.
c. ?*Chio put the book through the tunnel.
d. *Gummo put the book to the floor.

これと対照的に，(36')，(37')，(37") から明らかなように，put の本来の意味を示す push や thrust には Jackendoff の指摘するような共起する前置詞句の意味制限はない（(36')-(37') と (37") はそれぞれ『新編 英和活用大辞典』と私のインフォーマントによるものである）.

(36') a. He thrust the letter at me impatiently.
b. He pushed her into a chair.
(37') a. He was pushed from behind.
b. He pushed a steaming cup toward me.
c. A card was pushed through the letter slot.
d. He pushed the astray to her side of the desk.
(37") a. Groucho pushed the book from the shelf.
b. Harpo pushed the book toward the bed.
c. Chio pushed the book through the tunnel.
d. Gummo pushed the book to the floor.

(36'a,b) では，場所と経路の前置詞句が現れ，(37'a-d) では put とは共起できない起点，方向，ルートの前置詞句が生起している．(37") は，Jackendoff の指摘した put と共起しない前置詞句の例をそのまま push に置き換えたものである．さらに，push や thrust の場合には前置詞句は省略可能である（cf. (30)，(33)）.

put の本来の「押す」という核意味から「置く」という意味が自動的に派生される必要性はなかったと思える．何故なら，OED[2]の記述 (30) および中英語の用例 (31) にもあったように，押しても物が位置を変える必要がなかったにもかかわらず，物を移動して位置を変える意味を put が獲得したのは，非状態動詞と目的語名詞句と方向の場所語句から成る使役移動構文に生起することで，移動という構文的意味を表しさらに移動の終点を表す前置詞句のみと共起することになった，と考えられる．OED[2]に依れば，put が表していた「押す」という意味は，ラテン語起源の push（∠ OF *pousser, pou(l)ser* ∠L *pulsāre* to drive, push, beat）によって表されるようになった．OED[2]が記載する動詞 push の初出年は a 1300 年でしかも物の移動の方向や方法を示す副詞あるいは副詞句が共起する初出年は c 1450 年である（詳細は OED[2](s.v. *Push*, v) 参照）.

因に，現代英語における push の意味の put の用法は，以下の例で見られる．

(38) a. put a gun to his head
b. put his ear to the telephone (to=against) (Jackendoff 1990: 293, n.7)
(39) 'No, I can't face it. I'm too weak. I can't go alone.' Mrs Hutton pulled a handkerchief out of her black silk bag, and put it to her eyes. —— Aldous Huxley, "The Gioconda Smile" (行方 2007: 101-2)

以上の put の意味分布をまとめると以下のようになる．

(40)

	語彙的意味：	'push'	'place'
put NP_1 AT NP_2		OK/*	OK

動詞 put は，本来の「押す」の意味をある特定の前置詞句と共起して保持しているが，「置く」という意味が語彙的意味としては一般的と言えよう．

5. 結　　語

本稿の議論で明らかになったのは以下の点である.

(41)　a. 二重目的語構文に生起する場合のwriteには,「(手紙)を書いて出す」という語彙的意味はまだない.

b. putは,意味を「押す」から「置く」へと変化するに際して,場所付加詞を義務的に取る使役移動構文に生起することが要因の1つとして働いている.

c. putの意味変化は,動詞の意味の始動相から結果相への変化として特徴づけられる.

Traugott and Dasher(2002)は,意味変化は,話者(著者)と聞き手(読者)による言語使用の発話文脈での相互交渉的作業(すなわち誘因的推論)によって生じる一時的な語用論的含意が慣習化されることによってもたらされる,と主張している.つまり,意味変化は,言語使用という言語構造外的要因に起源がある(Traugott and Dasher 2002: 35-6)というものである.これに対して,本稿の主張は,言語構造内的要因も意味変化の一要因であるというものである.

Traugott and Dasher(2002)の主張をさらに深く吟味する必要があるが,これ以外の残された問題は,他の多くの動詞にも考察対象を拡大すると同時に歴史的資料に基づいた検証を行うことである.これらの問題についての議論は,別の機会に譲ることにする.

*本稿は,日本英文学会九州支部第59回大会(於西南学院大学　平成18年10月28日)のシンポジウム(英語学部門:構文理論的アプローチの妥当性を探る)における口頭発表「英語における項省略」の一節に大幅な加筆・修正を施したものである.

参考文献

Culicover, Peter and Ray Jackendoff (2005) *Simpler Syntax*, Oxford University Press, Oxford.

García Velasco, Daniel and Carmen Portero Muñoz (2002) "Understood Objects in Functional Grammar," *Working Papers in Functional Grammar* 76. University of Amsterdam.

Goldberg, Adele E.(1995)A *Construction Grammar Approach to Argument Structure*, The University of Chicago Press, Chicago.

Goldberg, Adele E.(2006) *Constructions at Work: The Nature of Generalization in Language*. Oxford University Press, Oxford.

Green, Georgia M. (1974) *Semantics and Syntactic Regularity*, Indiana University Press, Bloomington.

Groefsema, Marjolein (1995) "Understood Arguments: A Semantic / Pragmatic Approach," *Lingua* 96, 139-161.

Jackendoff, Ray (1990) *Semantic Structure*, MIT Press, Cambridge, MA.

Jackendoff, Ray (2002) *Foundations of Language*, Oxford University Press, Oxford.

影山太郎(1996)『動詞意味論』くろしお出版,東京.

Kirsner, R. S. (1973) "Natural Focus and Agentive Interpretation: On the Semantics of Dutch Expletive *er*," *Stanford Occasional Papers in Linguistics* 3, 101-14.

岸本秀樹(2001)「二重目的語構文」『動詞の意味と構文』影山太郎(編),127-153,大修館,東京.

久野　暲・高見健一(2002)『日英語の自動詞構文』研究社,東京.

Levin, Beth (1993) English Verb Classes and Alternations, The University of Chicago Press, Chicago.

Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Snytax-lexical Semantic Interface*. MIT Press, Cambridge, Mass..

行方昭夫(2007)『英文の読み方』岩波書店,東京.

Pinker, Steven (1989) *Learnability and Cognition: The Acquisition of Argument Structure*, MIT Press, Cambridge, MA.

Traugott, Elizabeth Closs and Richard B. Dasher (2002) *Regularity in Semantic Change*, Cambridge University Press, Cambridge.

Vendler, Zeno (1967) Linguistics in Philosophy, Cornell University Press, Ithaca, New York.

Wierzbicka, Anna (1988) The Semantics of Grammar, Benjamins, Amsterdam.

安井　稔(1988)『英語学と英語教育』開拓社,東京.

辞書
市川繁治郎（1995）『新編　英和活用大辞典』研究社，東京.
小西友七（1980）『英語基本動詞辞典』研究社，東京.
小西友七（2006）『ジーニアス英和辞典（第四版）』大修館，東京.
The Concise Oxford Dictionary of Current English(1976[6], 1982[7], 1990[8], 1995[9]), ed. Dellla Thompson, Clarendon Press, Oxford.
The Oxford English Dictionary（1989[2]）, prepared by J. A. Simpson and E. S. C. Weiner, Oxford University Press, Oxford.